

魚眼レンズ

テンペラという絵の具を知っていますか。顔料を卵黄や卵白に溶いたもので、不透明さが色に柔らかさを与え、精密なマチエールを可能にする。この「新しい」絵の具が、最近本土画壇で注目をされ始めている。沖縄ではまた本格的に描



永津 禎三氏

テンペラ画の魅力

く画家はいないが、初の個展(県民アートギャラリー)を開いている琉大美術科助手の永津 禎三さん(33)はこのテンペラ画による作品が主。昨年赴任したばかりで、そのデビュー

展はまたテンペラの魅力を知る上でも格好の個展となっていた。新しいといっても、本

来は十四世紀イタリアにおいて発達した絵画様式。ボッティチェリの「ヴィーナスの誕生」などルネサンス期の宗教画を支えた絵の具だ。

永津さんは、愛知県立芸術大学の大学院時代に、オーストリアの現代作家展でテンペラと出会った。「渦巻状のサイケデリックな絵だった。原色を使っても柔らかいトーンになる。ちょうど油と水彩の中間の感じ」と言う。

「絵は結局、どう色の粉を(画布に)定着させるか」とすれば方法はさまざま、古今を問わず画家は独自の様式を追い求めてきた。ところが、製品化された油絵画の全盛をいえる十九世紀以降は、絵画の画一化が進み画家自身の「手作り」は減った。

テンペラ画との出会いが、永津さんを中世宗教画への興味、さらに新しい展開へと導いたようだ。同展は二十四日まで。